
し紛れの言い訳でとんでもないことになっちゃいました・・・。 50音順小説Part～く～

黒やま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦し紛れの言い訳でとんでもないことになっちゃいました・・・。

50音順小説Partくく

【Nコード】

N1861Y

【作者名】

黒やま

【あらすじ】

50音順小説Partくくです。

題名と主人公の名前と最初の一文を「く」ではじめてみました。

（前書き）

三角関係って話を書いてみたかったです。
登場人物の設定をどういうふうにすればいいか悩みました。

「九^{くの}埜っ！一体どういうことよ！！」

「私とあの子、九埜君はどっちを選ぶの！？」

「「ねえどっち！？」」

九埜は二人の女の子に言い寄られていた。悪い意味で。

そもそもの発端は彼の発言から始まった。

九埜は高校時代の元カノ五十嵐瑛^{いがらしえいら}良に偶然出会った。

街中で買い物してるところをバッタリだった。

九埜は連れがいたし、瑛良も友達と一緒にだった。

しかし瑛良が九埜の連れ、百瀬^{ももせめぐみ}愛を見た途端、友達と別れてこちらについてきたのだ。

彼にとっては非常にまずい状況であった。

この二人、瑛良と愛は犬猿の仲であるのだ。

その仲の悪さは高校時代からで二人とも同じ部活のマネージャーにもあるのにそれは険悪なものだった。

そして彼にとっての非常にまずい要因となっているのが

現在彼女ら二人を二股しようとしている途中であることであつた。

愛とは高校三年間違うクラスであつたが、九埜の所属している部のマネージャーで

そして大学生となつた今では同じ大学で同じ学部である。

高校時代から九埜に好意を持っていたらしいが、以前は瑛良がいたため

積極的にアピールはしてこなかつた愛だが大学入学を契機に彼女から近づいてきた。

九埜もまんざらではない様子で周囲からはいつ付き合つてもおかしくないと思われている程だつた。

一方瑛良はクラスメイトでもあり、二年半付き合つてた彼女。

きつかけは彼女からの告白で一目ぼれだつたそう。

二年半付き合い決して仲が悪くなつて別れたわけではなく、

お互い違う大学で会う機会もなくなるだろうということで別れることになった。

それから三ヶ月、九埜大学一年生の夏の始めに瑛良と偶然再会。

その際に瑛良から友達からでいいからまたやり直そうと言われてそれからさらに三か月後の現在元の関係に修復中の時期であった。そのような時期に渦中の三人が同じ場にいるのは非常にまずいと感じた九埜は、

「やつ、やあ瑛良。友達と買い物している途中ならお邪魔だよな。じゃっ!!」

と言つて愛の腕を掴んでささと立ち去ろうとした・・・が

「ちよつと九埜！久しぶりに会ったんだしそっちについていてもいい？」

百瀬とも高校卒業以来だし。いろいろと話したいことあるんだよね。

「
なんとかして早くこの場から去ろうとした九埜の本心を見抜いた瑛良は友達に別れの挨拶をすませ

二人をほぼ引きずり状態でカラオケルームに直行した。

「さあ・・・。どういふことが洗いざらい吐いてもらおうじゃない。

「
机をバンツと叩き、九埜の注文したコーラがこぼれそうになった。

「九埜くん、もしかして五十嵐さんに復縁を迫られているの？」

「迫られているって・・・百瀬、あんたこそ一体九埜とどういう関係なのよ！」

愛がそつと九埜の膝に手を置いて瑛良をちらりと見るやいなや、

瑛良は目じりを吊り上げ愛に食って掛かった。

「私は今現在の彼女です。」

その言葉がさらに九埜を追い詰めた。

「えっ・・・。」

彼女ってまだ告白もしてないんだから・・・と思ったがこの状況では言い返せない。

「はんっ！ちゃんちゃおかしいわ。だって九埜の彼女はあたしよ。」

「えっっ！」

こちらにもさらに驚きである。今は友達という関係のはずなのに・・・。

やはり一気に二人の彼女をGETしようとしたのがまずかったのだろうか、

まさかこんな展開になるとは九埜は思ってもみなかった。

「九埜！はつきり言って！百瀬とはただの遊びなんですよ？」

「私は信じているよ、九埜くん。五十嵐さんとは何でもないんですよ？」

二人に迫られこの危機をどうやって回避するか頭をひたすらめぐらせていた。

「えゝゝゝあの二人が勘違いしてるかもしれないから誤解のないように言つとゝゝゝ。」

「四の五の言わずにはつきり言いなさい!」

「そのゝゝによゝゝによ。」

「ごめん、九埜くん。聞き取れなかったの。もう一度言ってくれる？」

「だからゝゝゝ二人のどちらとも付き合っていないっていうかゝゝゝ。」

そして冒頭部分に戻る。

「どっち!？」

どっちとも言い難いなか九埜は迷っていた。

どちらを選べばいいか分からなかった。

もし瑛良を選べば同じ学部のアとは嫌でも顔を合わせなくてはならないので気まずいし

愛を選べば血気にはやる瑛良のことだから何をしでかすかわかったものではない。

そうこう考えている内に瑛良がしびれを切らしたのかどすの利いた声で九埜に聞いただす。

「何とか言いなさいよ。」

「どっちか選べって言われても……。」

あれこれ思考しすぎたのか考えがまとまらなくなりついにおかしくなった九埜は大胆な結論を出した。

「そうだ。どちらか選ぼうとするからいけないんだ。だから俺はあえてどちらも選ぶ。」

九埜にとっては一番の大団円へ向かう解決策だと思ったが二人にとっては全く違った。

「信じられないくらい阿呆ね。」

瑛良はまるで汚物をみるような目でこちらを一瞥し部屋を出ていった。

「見損なった。」

愛も目頭を押さえ九埜を見ることなくカラオケルームを後にした。

「なんでこういうことになっちゃったのかな・・・。」

まさにこれこそ二兎追うものは一兎をも得ずだと感じた。

九埜は何も考えずただ曲を入力した。

それは今のこの気持ちを代弁するかのような選曲だった。

あゝ無情

(後書き)

チャチャチャチャンチャンチャー
ン♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1861y/>

苦し紛れの言い訳でとんでもないことになっちゃいました・・・。 50音順小

2011年11月14日22時21分発行